

ロンボク島の都市・集落・住居とコスモロジー

布野 修司

—— イスラーム世界の都市・集落・住居の形態とその構成原理に関する比較研究 ——

はじめに

1) 研究目的

本研究は、空間の形態とコスモロジーの関係を視点に、都市・住居・集落の構成原理を明らかにすることを大きな目的としている。すなわち、都市や住居集落の構成原理にかかわる宇宙観、思想、理念を問題とし、そのフィジカルな形態や様々な形象への具体的な表れ方をテーマとする。焦点を当てるのは、インドネシアのロンボク Lombok 島であり、比較のための圏域として、インドネシアを含めて広くイスラーム圏を考慮する。

住居はひとつのコスモスである、あるいは、住居にはそれぞれの民族の持つコスモロジーが様々な形で投影される、と一般に言われる^{※1)}。しかし、必ずしもそうは思えない地域も多い。つまり、コスモロジーは、必ずしも、具体的な形態や物の配置に示されるとは限らない。コスモロジーが形象として強く表れる場合と極めて希薄な場合がある。

インドネシア、とりわけ、ジャワ、バリ、東インドネシアにおいては、住居集落の構成とコスモロジーの強い結び付きを見ることができる^{※2)}。一方、一般に、イスラーム圏においては、住居集落の構成とコスモロジーとの結び付きは希薄である。その差異は何に起因するのか。

インドネシアは、今日、イスラーム圏の中で、少なくともそのムスリム人口の比重において大きな位置を占める。しかし、住居集落の構成を規定するのはイスラームの原理^{※3)}というより、土着的な基層文化のコスモロジーであるように見える。

中でも、ロンボク島は極めて注目すべき特性を持っている。知られるように、イスラーム教が支配的なインドネシアで、バリ島だけはヒンドゥー教が現在でも支配的である。バリ島の東に近接するロンボク島は、イスラーム化されているのであるが、一方、その西部にはヒンドゥー教の強い影響が残されている。同じ小さな島にイスラームの影響とヒンドゥーの影響の両方を見ることができるのである。そうした意味で、本研究の目的にとってロンボク島は極めて興味深い地域である。

2) 研究の背景

研究メンバーのほとんどは、1988年から1990年までの3年間、文部省科学研究費の助成を受けた重点領域研究「イスラームの都市性」に関する研究（比較の手法によるイスラームの都市性の総合的研究^{※4)}）に参加してきた（C班 都市の形態と景観）。その研究会は、形態と景観についてイスラーム都市の特性を明らかにしようというものであったが、その結果を大胆に要約すると、必ずしもイスラーム都市に固有な特性はないというものであった。そこでテーマとして浮かび上がったのが都市とコスモロジーの関係である。

具体的には「都城」（王権の所在地としての「都」そして城郭をもった都市、その2つの性格を併わせ持つ都市）について、それを支えるコスモロジーと具体的な都市形態との関係を、アジアからヨーロッパ、アフリカまでグローバルに見てみたのであるがいくつかははっきりしたことがある。

第1、王権を根拠づける思想、コスモロジーが具体的な都市のプランに極めて明快に投影されるケースとそうでないケースがある。東アジア、南アジア、そして東南アジアには、王権の所在地としての都城のプランを規定する思想、書が存在する。しかし、西アジア・イスラーム世界には、そうした思想や書はない。

第2、都市の理念型として超越的なモデルが存在し、そのメタファーとして現実の都市形態が考えられる場合と、実践的、機能的な論理が支配的な場合がある。前者の場合も理念型がそのまま実現する場合は少ない。理念型と生きられた都市の重層が興味深い。また、都市構造と理念型との関係は時代とともに変化していく。

第3、都城の形態を規定する思想や理念は、その文明の中心より、周辺地域において、より理念的、理想的に表現される傾向が強い。例えば、インドの都城の理念を著す『アルタシャストラ』^{※5)}や『マナサラ』^{※6)}を具体的に実現したと思われる都市は、アンコールワットやアンコールトムのようなインド文明の中心からは同縁にあたる東南アジアの都市である。

都市や住居集落の象徴的意味の次元と実用的機能的側面は必ずしも截然と区別できない。両方はダイナミックにかかわり合う。ある条件のもとでは、どちらかの側面

が強く表現され優位となる。時代によって地域によって異なる様々な都市や住居集落の形態を統一的に考える大きな手がかりになるのが、その形態とコスモロジーの関係である。本研究は、コスモロジー、より広く、人間の様々な象徴的実践が住居や集落の具体的形態にどう表れるのかというテーマをさらに深化させ、住居集落の構成原理に関する研究に寄与しようとするものである。

3) 調査概要

以上のような目的と背景のもとに、第1次ロンボク島調査を実施した。調査期間は1991年12月6日から12月24日である。

調査準備において、可能な限りの資料収集を行ったのは当然であるが、その過程で入手した6葉の地図⁽⁷⁾によって、極めて整然としたグリッドパターン⁽⁸⁾の都市の存在がわかった。チャクラヌガラ Cakranegara である。

その歴史をみてみると、バリ・ヒンドゥーによる計画都市であることがわかった。バリのカラングセム Karangasem 王国の植民都市であり、ヒンドゥーの都市理念がバリの諸都市よりもよく表されているように思われる。そこで調査のひとつの焦点はチャクラヌガラとした。

また、第1次調査としては、島全体の都市、集落の把握にウエイトを置いた。港湾都市としてのアンペナン Ampenan、北部山間部、南部丘陵部、東部とおよその地域区分をもとに住居集落パターン⁽⁹⁾の把握を行った。

さらに、ヒンドゥーとイスラームの差異を窺う上で実に興味深い対象として、双方の聖地となっている場所、寺院（プラ）があることがわかった。プラ・リンサル Pura Lingsar がそうである。そこで、ロンボク島西部を中心にプラの、特にオリエンテーションに関する調査を行うこととした。

1. ロンボク島の概要⁽⁸⁾

1.1 自然と生態

ロンボク島は、南緯8度に位置し、東にはバリ島が西にはスンバワ島が隣接している。東西、南北ともに約80 kmの幅をもつ(5435km²)。インドネシア語でロンボクというと「トウガラシ」という意味であるが、もともとは、島の東部のある地域の名であった。原住民であるササク族 Sasak 族は、サラバラン Salaparang と呼んでいたという(図1-1)。

知られるように、バリ島とロンボク島の間にはウォーレス線が走る。A. R. ウォーレス(1823~1913年)⁽⁹⁾は、鳥類、哺乳類の分布をもとに地球上を6つの地区に分割したが、その東洋区とオーストラリア区の境界が2つの島の間にある。その線の西と東では、植物も含めて生物相に大きな断絶がある。のみならず、人間活動の形態に

においても大きな境界がある。大雑把に言って、ウォーレス線の西は、稲と水牛の世界であり、東は芋と豚の世界である。

現在、ロンボクでは、稲作が盛んだが、もともとは、根菜類の栽培をベースとした島である。リンジャニ山の麓の盆地は、にんにくの産地である。

地形はバリ島によく似ている。中央にインドネシア第2のリンジャニ山(3726m)が聳え、大きく3つの地域に分けられる。すなわち、荒れたサバンナのような風景の見られる、リンジャニ山を中心とする北部山間部、豊かな水田地帯の広がる中央部、それに乾いた丘陵地帯の南部である。気候は、1年は乾季と雨季に分かれ、4月から9月が乾季に、10月から3月が雨季にあたる。

1.2 ササク族

ロンボク島の原住民はササク族である。全人口は約300万人(1991年)に及ぶのだが、その約9割を占める。残りの1割で主要なのはバリ人である。バリ人は、ほとんどがチャクラヌガラを中心とした西ロンボクに住んでいる。他に、少数だが中国人、ジャワ人、アラブ人、マッカサル(ブギス)人、スンバワ人などがいる。港湾都市、アンペナンには、カンボン・アラブ、カンボン・ブギス、カンボン・ムラユ(マレー)などの名前が現在も残っている。中国人は、アンペナンのほか、マタラム、チャクラヌガラを中心に居住している。

20世紀初頭の社会学者たちは、通常ロンボクの人々を3つに分けて考えた。ブダ(Buda, Bodhas)とワクトゥ・テル(Waktu telu もしくはワクトゥー・ティガ Waktu tiga: ティガは3を意味し、ヒンドゥー、イスラーム、アニミズムの3つの宗教的伝統を持つからという説がある)、そしてワクトゥー・リマ(Waktu lima)である。ブダは、イスラーム化を逃れてバヤン Bayan とかタンジュン Tanjung からスンバルン盆地にかけて、山間部に逃げ込んだ人々とされる。一方、イスラーム化された人々が2つに分けられる。正統的で敬虔なムスリムに改宗した人々がワクトゥー・リマで、従来の宗教的伝統も保ち続ける人々がワクトゥー・テルである。ワクトゥー・リマは5回という意味であり、毎日5回お祈りする敬虔なムスリムを指す。

2. ロンボク島の住居集落⁽¹⁰⁾

2.1 住居集落の類型

ロンボク島の一般的な住居集落のパターンは必ずしも明快ではない。しかし全域を概観すると、そうした中にいくつかの典型的な集落パターンを区別することができる。第1次調査をもとにロンボク島の住居集落を概観してみると以下になる。

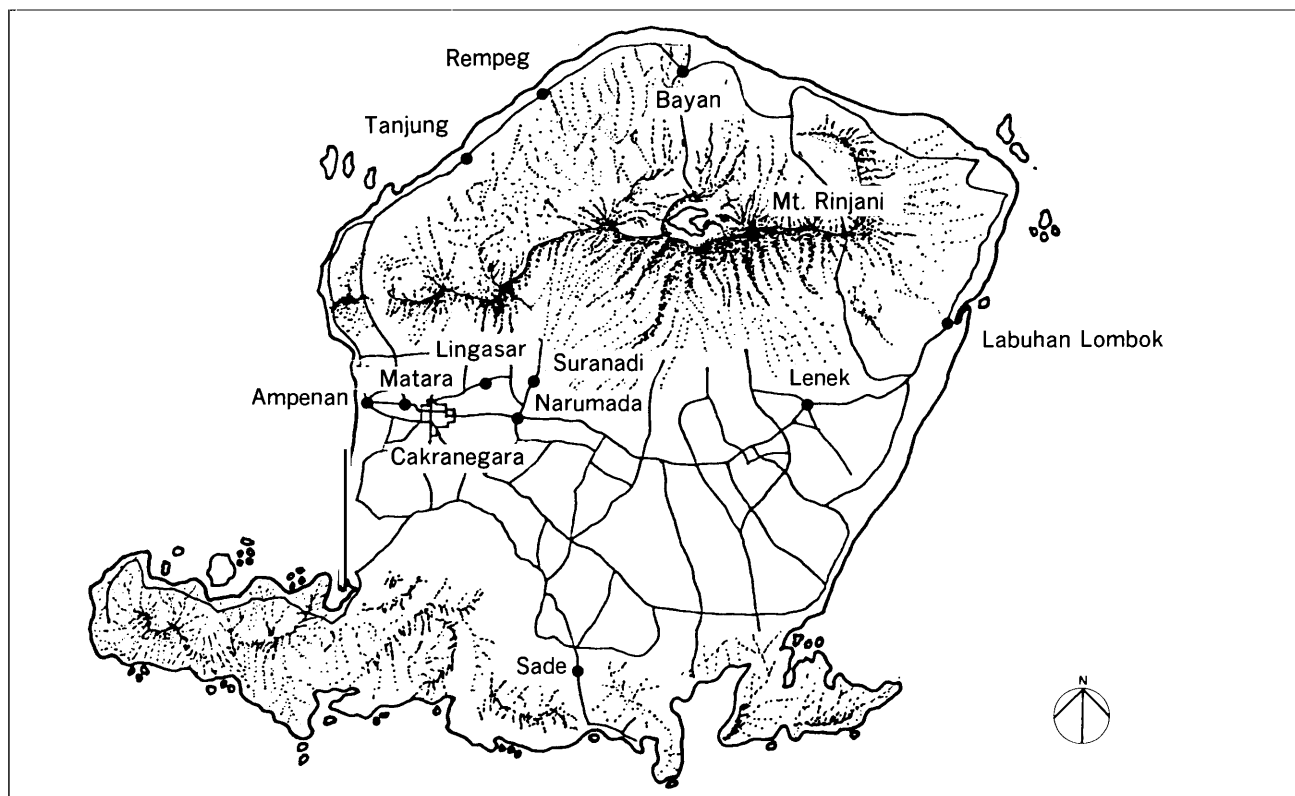


図 1-1 ロンボク島地図



写真 2-1 SADE 集落外観



写真 2-2 SADE 住居外観

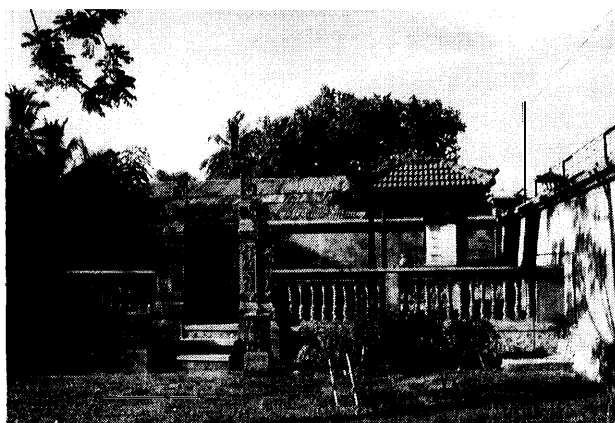


写真 2-3 バリ人住居（チャクラヌガラ）の北東角に置かれたサンガ（屋敷神）



写真 2-4 スンバワ人住居外観

A. ワクトゥー・テルの住居集落

ワクトゥー・テルの集落は、まず、北部山間部のバヤン Bayan スンバルン盆地 (Sembalun Lawang など) に、住居棟とブルガ bergaq と呼ばれる露台・集会棟、米倉がリニアに平行に並ぶ明快なパターンがある。また、南部の丘陵地域 (Sade など) に等高線に沿う形で曲線的に住居が配列される丘状集落がある (写真 2-1, 2)。

2つの地域の住居形式は一見よく似ているが、架構形式を異にし、床レベルの扱いに違いがある。レンベグ Rempeg に見られるように、高床と地床の様々な住居形式が見られるのが興味深い。

B. ワクトゥー・リマの住居集落

東ロンボク一帯はワクトゥー・リマの居住地域である。この地域では、デサ・レネック Desa Lenek に明快な住居集落パターンが見られる。住居と米倉が平行して並び、西端に集会 (礼拝) 棟が置かれるというこのパターンは、必ずしも明快なパターンをもたないワクトゥー・リマの住居集落の中では、特徴的なものとして挙げられる。

C. バリ人の住居集落

西ロンボクには、バリの住居集落パターンが目立つ。最も典型的なのがチャクラヌガラである。また、チャクラヌガラの周辺、西海岸のタンジュン Tanjung などにも北東角にサンガ (屋敷神, 写真 2-3) を置く、分棟式の住居形式が見られる。

D. スンバワ人の住居集落

東海岸のラブハン・ロンボク Labuhan Lombok の周辺には、スンバワ人の住居集落パターンが見られる。地床式が支配的であるロンボクにあって、切妻高床の住居形式は目立つ (写真 2-4)。

E. 都市カンポン

アンペナン、マタラムなどの都市の居住パターンは、ジャワに見られるカンポンのパターンである (写真 2-5)。



写真 2-5 アンペナン周辺のカンポン

以下に調査した具体的な集落をみてみたい。

2. 2 デサ・レンベグ Desa Rembeg

デサ・レンベグは、西部から北部にかけた丘陵部に位置し、水田耕作を生業とする、10世帯ほどの小さな集落である。ロンボク島北部リンジャニ山麓に広がるスンバルン盆地には、大規模な集落も存在するが、北部山間部では、10~20戸の住居集合が1単位となるのが一般的である。

デサ・レンベグが興味深いのは、ロンボク島では特異な高床式住居と、床のレベルの構成を異にする様々なタイプの住居形式が混在することである。

東南アジアの住居は一般に高床式である。しかし、例外がある。島嶼部では、ジャワ・バリがそうである。すなわちこれらの地域の住居は地床式なのである。そして、スンバワ人などの例外を除けば、ロンボク島の住居もまた地床式である。

知られるようにボロブドゥールのようなチャンディのレリーフには、高床式住居のみが描かれている。ジャワ、バリ、ロンボクが、何故地床式になったかは、必ずしも定説がない。イスラームの侵入後、高床を禁じられたという説もあり、南インドの形式が移入されたという説もある。もともとヒンドゥー文化は土間を好み、土の感覚を大事にしてきたとも言われる。いずれの説とも決定しがたいが、床のレベルにも、文化に根ざした生活感覚がかかわっていることは確かであろう。

ただ、ロンボク島の場合、地床といっても、土壇を高く盛り上げるところ、そして、床のレベルを違えるところに特徴がある。ひとつの見方として、高床から地床への変化過程を示していると考えてもいいかもしれない。この推論を可能にするのがこのデサ・レンベグである。

このデサ・レンベグは規則性の弱い集落形態をとる (図 2-1)。この集落における付属施設として、ブルガと呼ばれる露台がある。デサ・レンベグには2棟のブルガが見られる。小規模で4面開放の高床式建築である。このブルガと住居のペアによる構成は、バヤンではリニアに並び明快な形式となるのであるが、ここではそこまでは明快ではない。

住居形式については、基本的には2種の高床式住居と地床式住居、合わせて3種の住居形式が見られる (図 2-3)。高床式住居の1つはレベル差をもたない。中央の仕切壁によって前後に2室に分けられる。この高床式住居を所有する世帯は、別にもう1棟、かまどが設置された地床式の建物を持ち、炊事はそで行われる。

ひとつの高床式住居で床のレベルが異なる形式はデサ・レンベグの集落内に5棟存在する。同様に、平面は前後に2つに分割され、別棟をもつ場合が多い。後部が四周を壁に囲まれた部屋となるのに対し、前部は半公共

的なベランダ空間となり、憩いの場として利用されることもある。

地床式住居は、集落内に3棟見られ、寝起きはベッドで行われ、調理に際してはかまどを用いる。

このようにデサ・レンペグ内には様々な形式の住居が見られるのであるが、高床式住居といっても、ロンボク島に一般的に見られる高低2つの床レベルをもつ地床式住居との共通点がある。東南アジア全体の、高床式住居と地床式住居の分布から考察すると、かつては高床であったことが明らかであるとすると、2つの床レベルをもつ高床式住居はロンボク島における2つのレベルをもつ地床式住居の祖型と考えてもいいかもしれない。

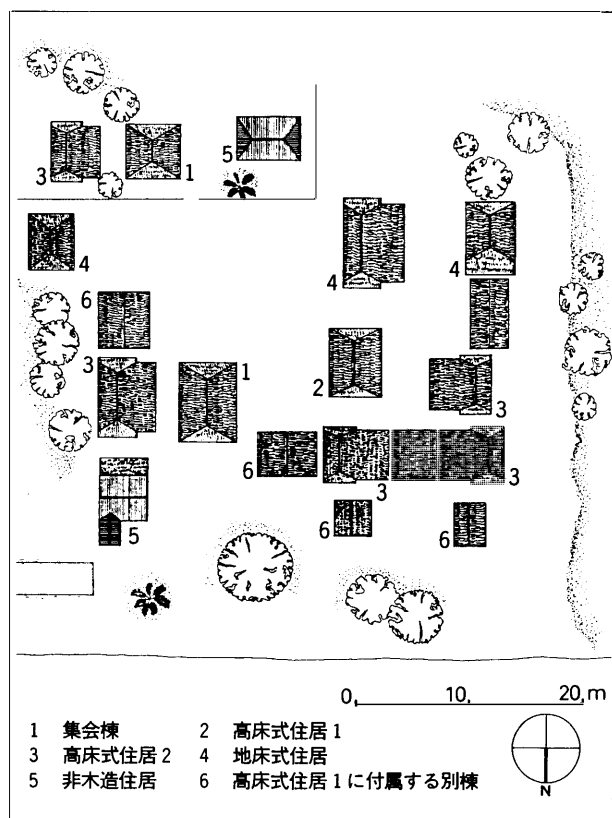


図2-1 DESA REMPEG 集落配置図

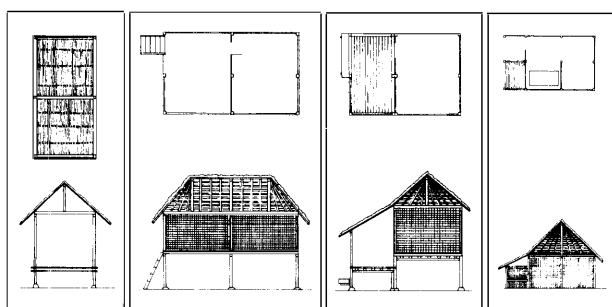


図2-2 集会棟

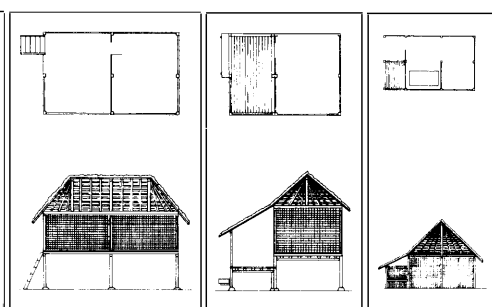


図3-3 DESA REMPEG の住居
(右から高床式住居1, 2, 地床式住居)

2. 3 デサ・バヤン Desa Bayan⁽¹¹⁾

バヤンは、かつてはブダが居住したというワクトゥー・テルの集落である。住居・ブルガ・米倉がリニアに平行に並ぶ集落パターンをとる。スンバルン盆地では、そのパターンが崩れつつあるのであるが、まだ、このバヤンからスンバルン盆地にかけて、このような集落を、点々と見ることができる。デサ・バヤンははっきりとした1つの集落類型と考えて良い。

集落全体は、4つのドゥソン duson (住区) からなる。今回調査した住区はカラシ・サラ Karang Salah と呼ばれ、13世帯が居住している。図2-5に、その配置および断面形を示した。住区内においては、住居・ブルガ・米倉がリニアに、そしてほぼ規則正しく平行に並んでいる。この住区は、斜面に沿った形をとっているが、住居がブルガを挟み込むように、すなわち、1軒あるいは2軒の住居が1つのブルガを使用できるように、配列されている。集落の主な構成要素としては、まず、中心施設としてのモスクがある。それは、小高い丘の頂上に位置し、図2-5に示すように西の方角（実際には26度北に振れている）に向けて、ニッチが設けられている。これは、ロンボクでもミフラブ mihrab と呼ばれているが、メッカの方向を示す。中央の4本の柱で囲まれた部分には、梁から吊るされたドラム (bedug) があり、お祈りの時間を告げるために用いられる。これらは、この地域の一般的なモスクに共通して見られる特徴である。また、ミンバール mimbar と呼ばれる聖書台が、ミフラブの前に置かれており、それには水の神ナーガ Naga を象徴とする装飾が施されている。バヤンのモスクは、4本の木の柱と竹材を主構造とした木造建築で、方形の上部と下屋の間から光を採る形態をしている(写真2-6)。この屋根形態は、ジャワやバリでは、タジュク tajuk と呼ばれるものであるが、その形態がモスクに用いられており、興味深い。さらに、このモスクの形態は近年、ロンボクにおいてRC造等で建てられるモスクにも踏襲されており、4本柱の木造モスクは、その原型になっていると考えられる。

その他の公共施設として挙げられるものには、マカム Makam とカンブ Kampu がある。マカムとは、先祖の墓のことであり、モスクのある丘に配置されている。カンブとは、儀式や礼拝の行われる場所であり、クマリ kemaliq とも呼ばれている。イスラーム教以前からの土着の聖地である。

一般的な住居タイプの平面および断面形を図2-6に示した。この住居タイプは、バレ・ベレ Bale Belek あるいはバレ・ロカ Bale Lokak という名称を持つ。住居はベッド・机・椅子・食卓・かまど等を有するが、窓はなく、中は薄暗い。中央に位置した、6本の柱で囲われた部分は、イナン・バレ Inan Bale と呼ばれ、屋根裏の機

能を持ち、寝床として用いられたり、倉庫として用いられ
たりする。イナン・バレの床面は約175～180cmの高さ
に位置し、側のベッドより上り下りを行う。イナン Inan
という言葉は、エナム enam の方言で、「6」を意味する。
この「6本柱の家」という呼称は一般的に使われている
ことから、この形式は1つの型になっているとみていい。
かまどに関しては、住居内に所有しているものと、そ
うではないものがあり、後者の場合は、それぞれのブル
ガにかまどが設置されている。

この集落の住居は、地床式の土間であるが、かまどの
設置されたブルガは高床式となっている。日常における
家族間の団らんや、一般的な社会生活、すなわち、コミュ
ニケーションはブルガで行われる。また、死者は墓に送
り届けられるまでの間ブルガで安置されるなど、儀式の
場としての機能も併せ持っている。このようにブルガは、
住生活において必要不可欠な存在で、住居とブルガが一
体となって1つの住居形式を構成していると考えられ
る。

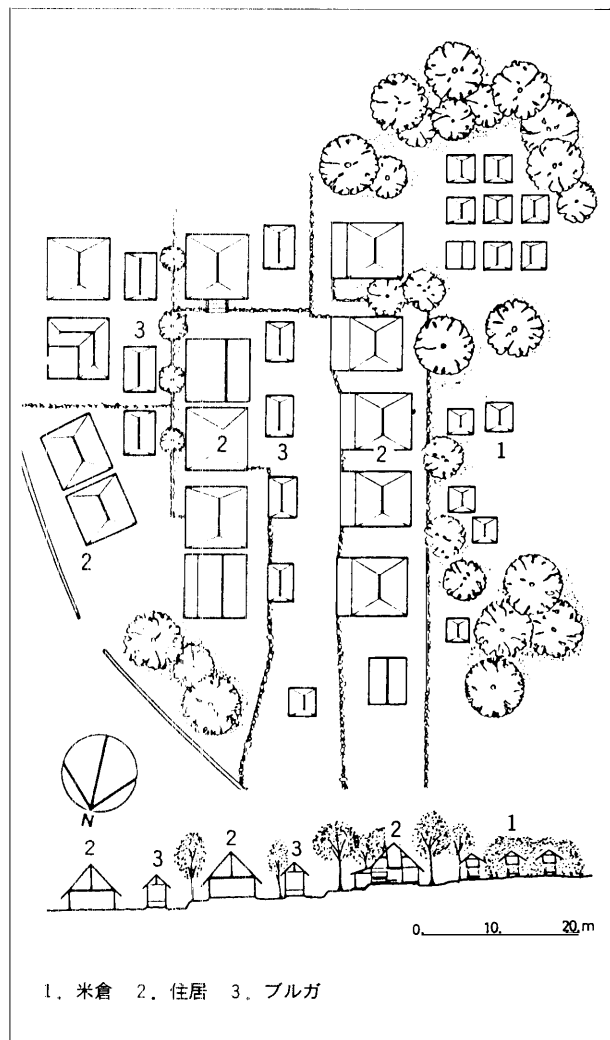
以上見た例においては、必ずしも、コスモロジーと住
居集落形態との強い関係を見ることはできない。それが
はっきりしているのは、バリ人の集落である。ワク
トゥー・テルの住居集落の場合、明快に読み取れるのは、
住居とブルガをペアとする単純で明快な形式である。デ
サ・バヤンのように規模が大きくなると集落の核にはモ
スクが置かれる。一般的にモスクは高台に置かれる傾向
にあるが、それを中心に住居が配されるわけではない。

南部の丘陵部には、上述したように等高線に沿って住
居が配列される集落が多い。ササック族の場合、基本
的な住居形式を地形に合わせて配置する、そうした素朴
な原理が一般的である

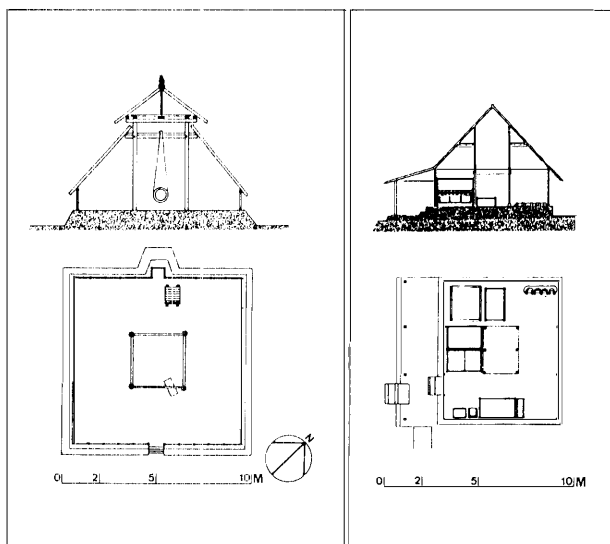
第1次調査では、以上のような概観で終わっているの
であるが、さらに地域差を含めて住居集落のパターンと
その構成原理を考察する必要がある。



写真一六 DESA BAYAN モスク外観



図二一四 DESA BAYAN 集落配置図・断面図



図二一五 モスク

図二一六 BARE BELEK

3 チャクラヌガラ Cakranegara

3. 1 チャクラヌガラ Cakranegara の建設^(注12)

チャクラとはサンスクリットで宝輪、ヌガラは国を意味する。その中心の寺であるプラ・メルが建設されたのが1720年、同じく王宮に隣接するプラ・マユラが建設されたのが1744年である。18世紀初頭には都市の基礎がつけられたとみていい。

当初、バリのカラングセム王国は東進を続ける。スンバワ島にもその勢力を及ぼそうとするのだが、さすがに、既に VOC (オランダ東インド会社) の影響下にあったスンバワ支配には失敗している。しかし、この間、ササックの王国は完全にその支配下に入った。1740年頃のことである。

18世紀末から19世紀にかけてササックの王国はいくつかの王国に分かれる。19世紀初頭には、西部ロンボクに、パガサンガン、パグタン、マタラム、チャクラヌガラ(カラングセム) の4つが分立したという。東部についてはその支配力はかなり衰えたい。19世紀初頭には、西部と東部で異なる社会が形成されるのである。

バリ人の大多数は先の4つの都市に住んだ。4つの都市の周辺には多くのササック族の村があり、また、離れてナルマダ Narmada, リンサル Lingsar, グヌンサリ Gunungsari などの王宮があった。西は最も重要な港ア

ンペナン、東はロンボク中央の森ジュリン Jurin, 北はリンジャニ山を中心とする高地、南はプレサック・クリバン Presak Kuripan と呼ばれる村の範囲がバリの直接支配領域であった。それに対して、東部は地方長官を通じて支配する形がとられる。

3. 2 チャクラヌガラ Cakranegara の構成

チャクラヌガラは、実にきれいな格子状パターン of 都市である。バリのカラングセム王国の植民都市であり、その都市理念をモデルとして建設されたと推測される(図3-1)。ヒンドゥーの都市理念に基づいて建設された都市の中でも珍しく全体が残されている。インドを含めてもそう例がない。

チャクラヌガラの中心にはプラ・メルが、西端にはプラ・ダレム pura dalem (死の寺) が、東端にはプラ・プセ pura puseh (起源の寺) が位置する。この構成は、バリのギャンヤール Gianyar, カラングセム, クルンクルン Klungkung などの構成と同じ理念に基づいていると考えられる。中央のプラ・メルに接してバサル (市場) がある構成も、ジャワやバリで見られるパターンとの関連を類推させる。

住区は格子状のパターンによって構成されるが、街路には3種類ある。中央を南北に走る街路は最も広く、メインストリートとなっており、東西に走る街路沿いにカ

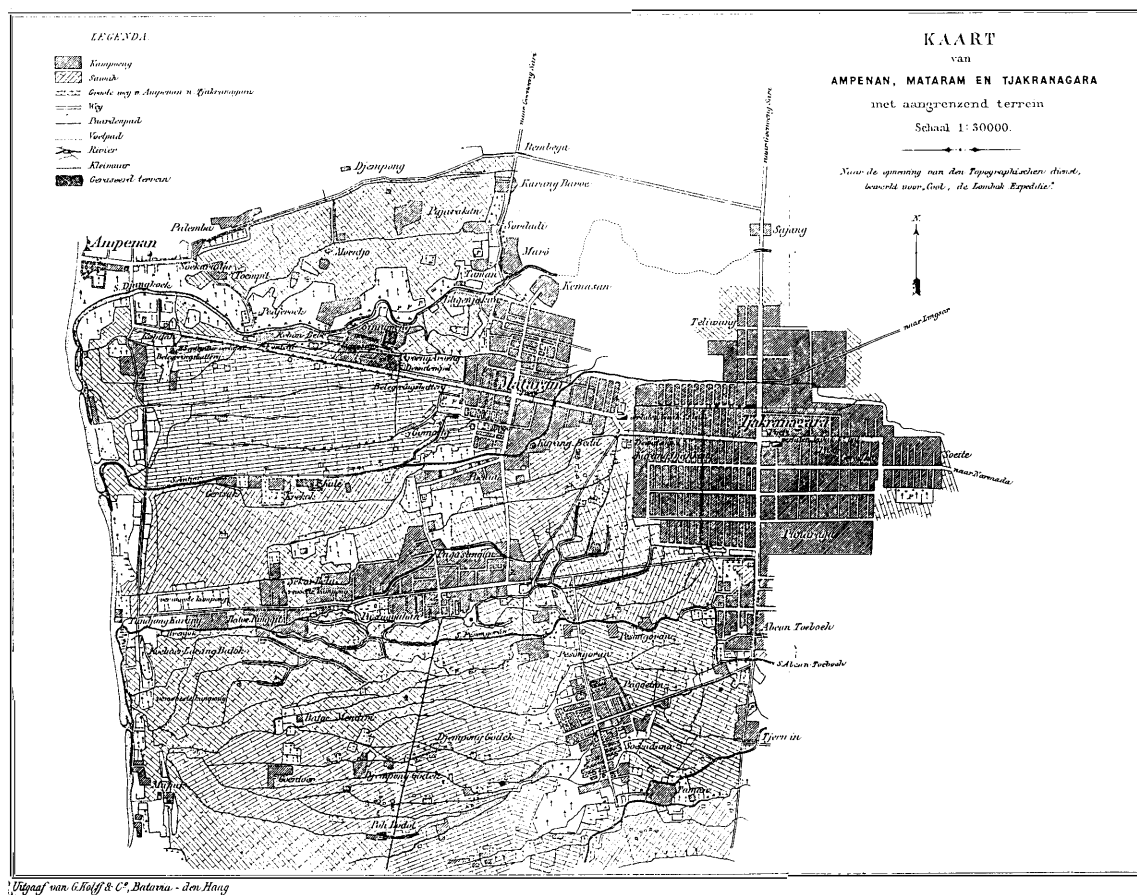


図3-1 チャクラヌガラ 'De Lombok Expeditie'^(注12)より

ランガセム最大の寺院であるブラ・メルと王宮がある。その次に広い街路が、東西南北に正方形区画を形成する(図3-2がそのモデル図)。各区画は、南北に走る一番細い街路によって、さらに4つの短冊状街区に分割される。調査によると、現状では宅地の合筆・分筆の結果、若干の変化が見られる。しかし、短冊状街区は基本的に背割され、さらに南北に10筆の正方形の宅地に分割されている。従って、計画上是1区画80筆の宅地から構成されていたと考えられる。

現状においてはかなりの変化が見られる。ブラ・メルの北側にはモスクがあり、その周辺地区は計画性のない細い路地が入り組むイスラーム教徒が住む地区となっている。また、東端部にもイスラーム教徒が多く住み、サンガを持つバリの的な住宅の戸数は少ない。そして、南端部には空き地が多く見られ、一部は畑となっている。一方、西北部地区は、比較的ヒンドゥー教徒の住民が多く、堀に囲まれ、宅地の北東隅にサンガをもつバリの的な住居が多く見られ、建設当時のチャクラヌガラの姿を残している。

ムスリムとヒンドゥー教徒が共に住む形は極めて興味深い。ブロックごとにその共住の実態を調査(一部未完)したが、例えば、その状況は図3-2のようである。

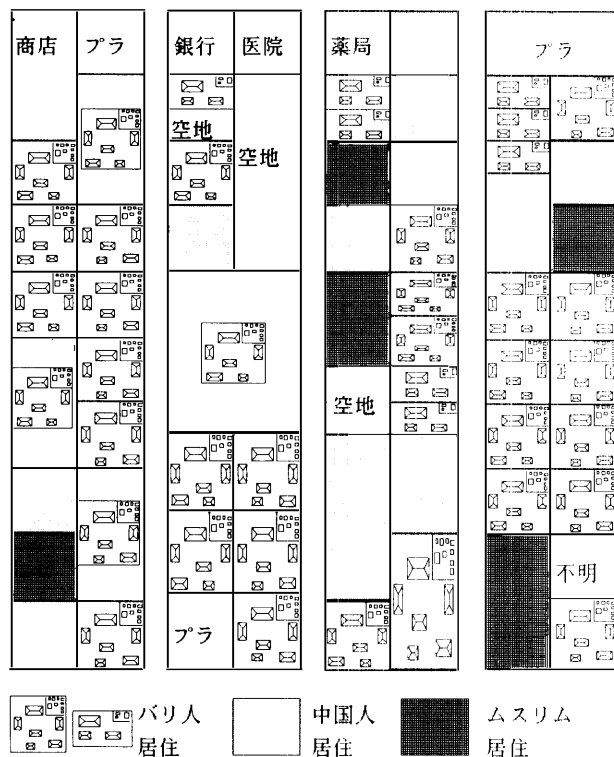


図3-2 チャクラヌガ宅地割・居住配置図

3. 3 カラン krang とプラ・メル Pura Meru

ロンボク島のプラの中で最も大きく、最も印象的なのが、バリのランガセム王国によって、ロンボク島の当時のすべての小王国を統合する中心として建立されたブラ・メル(メール山、須弥山、図3-3)である。このプラは周囲を頑丈な壁に囲まれ、東西にのびるチャクラヌガラの主要道(スラパラン通り Jl. Selaparang)に面し、北側の王宮とともに、チャクラヌガラの中心的施設となっている。

ブラ・メルの名が示すように世界の象徴であり、ヒンドゥー教のブラフマ神、ヴィシュヌ神、シヴァ神に捧げられている。敷地構成は、東西方向に3つの部分に分けられ、それぞれ天、人、地に対応すると言われる。すなわち、スワ(Swah, ジャワ、バリ、ロンボクでマカラ makara 以下同様)、ブア(Buah, ウカラ Ukara)、ブール(Bur, アカラ Akara)と呼ばれて区別される。一番西側に入口が設けられているが、そこがブールである。

この3つの部分のうち最も重要なものは東端のスワの部分で、ここには3つの塔を始めとする建物が配置されている。11層の屋根をもつ中心の塔はシヴァ神を、9層の屋根をもつ北側の塔はヴィシュヌ神を、7層の屋根をもつ南側の塔はブラフマ神を象徴している。

またこれらの3つの塔を囲むようにして、北側と東側に33の小さな祠(ほこら)がならべられている。それぞれの祠に固有の名称、さらに対応するプラの名称が併記され、チャクラヌガラの33のカラン(住区)と関係づけられている。すなわち、33のカランによって維持管理されている。祭礼時には各カランから数人が訪れ、それぞれの祠に対してお供えをし、祈りを捧げるのである。チャクラヌガラは格子状パターンによる住区構成をとっており、現在ではその格子状パターンに従って住区割がなされ、ブロックごとに名称が付けられている。しかし、ブラ・メルの33の小祠と対応するプラは必ずしもブロック単位とはなっていない。図3-4は33のプラをプロットしたものである(29まで確認、表3-1, 2)。祭祀(さいし)集団としてのカランとブロック単位の住区は必ずしも一致していない点が興味深い。

一方、33という数字に注目すれば、宇宙論的数⁽¹³⁾として、それはメール山(須弥山)の頂上に住むとされる33の神々を想起させる。東南アジアでは家臣や高官の定員数として、あるいは王国を構成する地方省の数としてしばしば登場する数であり、例えば、ビルマのカミング王朝時代のジャヴァ、ペグー王国などにそれが見られる。

東西に走る主要道を挟んで北側に存在するプラ・マユラにも33の噴水が設けられているのも偶然ではないであろう。

仏教の体系において須弥山とは宇宙の中心をなす世界山である。この山はそれぞれ7つの環状の海によって互

いに隔てられ7つの山脈によって取り囲まれている。これらの山脈のうち、最後の山脈を越えると、大洋が広がり、その中には、4方に1つずつの計4つの大陸がある。須弥山の南にある大陸が瞻部州で、人間の住むところである。ここでも宇宙は1つの巨大な岩の壁、つまりチャクラヴァーダ(鉄围山)山脈によって取り囲まれている。須弥山の斜面には、極楽のうち、一番下の極楽、つまり4大王あるいは世界の守護者の極楽がある。その頂上には第2の極楽、つまり、33神の極楽があり、そこにはスダルサーナ(善見天)、つまり神々の都市もあるが、ここではインドラが王として君臨している。須弥山の上方にはその他の天空の居住地が積み重なって聳えているとされる。

プラ・メルはチャクラヌガラの住民にとっての信仰の中心でもあり、かつ、コミュニティ統合のための象徴的な核としても存在しているのである。

4. プラの構成とオリエンテーション^{註14)}

4. 1 プラ・リンサル Pura Lingsar

プラ・リンサル(図4-1)はチャクラヌガラの北東約15kmに位置するプラで、ロンボク島における最も神聖なプラであると言われている。このプラは1714年に建立され、ヒンドゥーの聖地とイスラームの聖地が明確に隣接するという点において特徴的である。イスラームといっても、ロンボク島では前述のように、ワクトゥ・

テル(イスラーム教以外の土着の神々も信仰)、ワクトゥ・リマ(敬虔なイスラーム教徒)というように2つに分けられ、プラ・リンサルを信仰対象にしているのは主にワクトゥ・テルのほうである。

敷地の構成は、大きく2つに分割されている。2つの敷地の間には高低差があり、北側のほうが高い。北側はヒンドゥーの寺ガドゥであり、南側はワクトゥ・テルの聖地クマリとなっている。毎年、年1回建立の日を記念して祭礼が行われる。信仰対象別に、分かれて礼拝を終わらせたあと、祭礼の終わりに人々は二手に分かれ、ちまきを投げ合う。よってこの祭礼は別名「ちまき合戦」とも呼ばれている。

ガドゥは、6つの社と2つのパドマサナ(Padmasana)と呼ばれる塔によって構成され、礼拝は基本的に北側中央の社に対して行われる。つまり「北向き」に礼拝が行われる。一方南側のワクトゥ・テルの聖地クマリは、神に捧げられた池によって特徴づけられる。その池には神聖なウナギが住んでいる。神聖なウナギの池の隣には、白や黄色の布や鏡によって飾られた捧げ物などが置かれている場所がある。ここでの礼拝は「北向き」に行われる。

プラ・リンサルの4,500m東にプラ・リンサル・ウロンがある。このプラはプラ・リンサルよりも建立年代は古いと言われ、プラ・リンサルの原型であると考えられている。

敷地構成はプラ・リンサルと同様に上下2面に分か

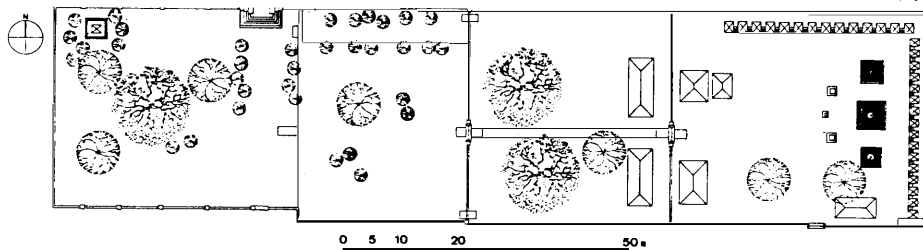


図3-3 プラ・メル配置図

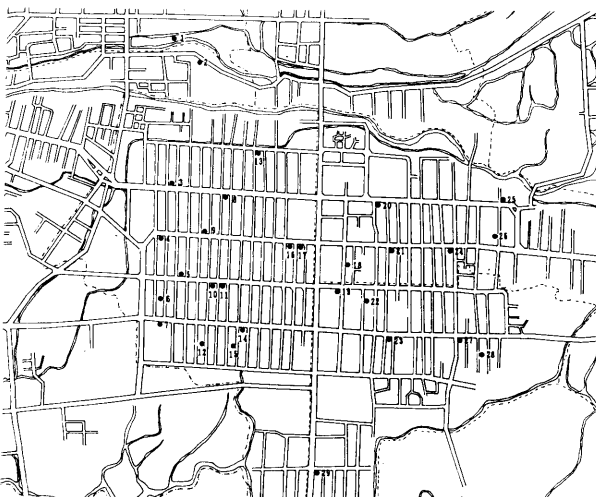


図3-4 チャクラヌガラにおけるプラ分布図

表3-1 チャクラヌガラのプラ

名称
1 PRM. KR. JERO PEKANDELAN
2 PRM. KR. JERO
3 PRM. KR. BJ. PANDE
4 PRM. KR. JASI
5 PRM. KR. BJ. GANJIH
6 PRM. KR. LEDE
7 PRM. PASUPATRI
8 PRM. KR. SIDEMAN
9 PRM. BJ. MANTRI
10 PRM. KR. KERI2
11 PRM. KR. KERI1
12 PRM. KR. TUNGGAKEBELE
13 PRM. JERUK MANIS
14 PRM. KR. KUBU
15 PRM. CARIK KAUH
16 PRM. KR. BELUMBANG
17 PRM. KR. BENGKEL
18 PRM. KR. TULAMBEN
19 PRM. RENDANG KELOR
20 PRM. KR. SONGKANG
21 PRM. BJ. ANBUNGAN
22 PRM. KR. KELEBUT
23 PRM. KR. KECICANG
24 PRM. KR. SILUMAN SELAFAN
25 PRM. CEDUNG NEGARA SAKAH
26 PRM. KR. TANGKEBAN
27 PRM. KR. SERAYA
28 PRM. KR. JASL
29 PRM. ANGKAN TELU

表3-2 プラ・メルの祠

祠名称(東側)
1 LGBTR RING BAGUS
2 LGBTR BAGUS BEBOTOM
3 LGBTR GUNNUN AGUNG
4 LGBTR GDE BUKIT
5 LGBTR SILUMAN MAJEPAHIT
6 LGBTR PURE PUSEM
7 LGBTR RTG ANDAKASA
8 LGBTR HYANG GENI JAYA
9 LGBTR BUKIT MANCU
10 LGBTR AYUMASMEKETEL
11 LGBTR BAGUS MASPIIT
12 LGBTR BAGUS BESANJIM
13 LGBTR TOH LANGKIR
14 不明
祠名称(北側)
1 LGBTR GUNNUNG PANGSUG
2 LGBTR BAGUS PENJOAN
3 LGBTR BAGUS PENJOAN
4 LGBTR RAMBUT SIMI
5 LGBTR BGS NYONGYANG
6 LGBTR BGS PEKERATAN
7 LGBTR SILA YUKTI
8 LGBTR BGS BONGAYA
9 LGBTR GDE RAMBUT PETUNG
10 LGBTR RING TEGEH
11 不明
12 不明
13 LGBTR GUNUNG RINJANI
14 LGBTR AYUMAS BATSU DENDENG
15 LGBTR BAGUS PENJOAN

れ、東側の上段にはガドゥが、西側の下段にはクマリが配置されている。上段での礼拝方向は「北向き」となっており、下段における礼拝は「北向きと東向きの2通り」に行われていた。

4. 2 プラとオリエンテーション

プラ・スラナディ Pura Suranadi

ロンボク島で最も神聖なプラの1つであるプラ・スラナディ（図4-2）は神聖な湧き水で有名である。このプラでは、中央一番奥の一段高くなったところにガドゥが配置され、クマリはガドゥの約10m手前の北側に位置している。ガドゥに対する礼拝方向は東北15度、およそ「リンジャニ山」の方向、クマリに対しては「北向き」となっている。

プラ・スガラ Pura Segara

このプラ（図4-3）はアンペナンの北2mの海辺に建てられており、海を挟んで対岸にバリ島のアグン山を望む。このプラでは、イスラームとの混合はみられず、純粋なヒンドゥーのプラで、人々は西側の2つの塔に向かって、つまり、島の向こうにある「バリ島のアグン山」を向いて礼拝する。

ナルマダ Narumada

ナルマダ（写真4-1）はロンボク島を東西に横断する主要道沿いの都市で、チャクラスガラから約10m東に位置する。ここに夏の王宮がある。この王宮の特徴として、人造湖が挙げられるが、これはリンジャニ山の麓のスガラ・アナク湖に巡礼に行けなくなった当時の王が、それをまねて1805年に造ったものである。また、人造湖に隣接して、リンジャニ山を模して造られた小高い丘があり、その向こうにはリンジャニ山を望む。ここでは人造湖の手前にある宮殿から丘の方を向いて礼拝する。すなわち、「リンジャニ山」を向いて礼拝するのである。

以上のように、西ロンボク地域の主要なプラでは聖地におけるオリエンテーションが、プラの平面構成に関して重要な要素となっている。

基本的に、プラはバリ・ヒンドゥーの影響のもとに建てられているため、オリエンテーションに関してもバリ・ヒンドゥーの概念に従う。つまり、山は神の住まう場所と考えられ、海は悪魔の住まう場所と考えられた。日の出る方向は聖なる方向と考えられ、日の沈む方向は悪の方向と考えられた。ガドゥの礼拝方向はプラ・スガラのみが西向きで、プラ・スラナディ、ナルマダはリンジャニ山の方向、リンサール、リンサール・ウロンは北の方向である。すなわち、すべて山がオリエンテーション決定の中心的な役割をはたしている。その山がバリ島のアグン山か、ロンボク島のリンジャニ山かによって礼拝方向に違いが生じているものと考察される。また、クマリについては北を向いて礼拝するのが基本である。

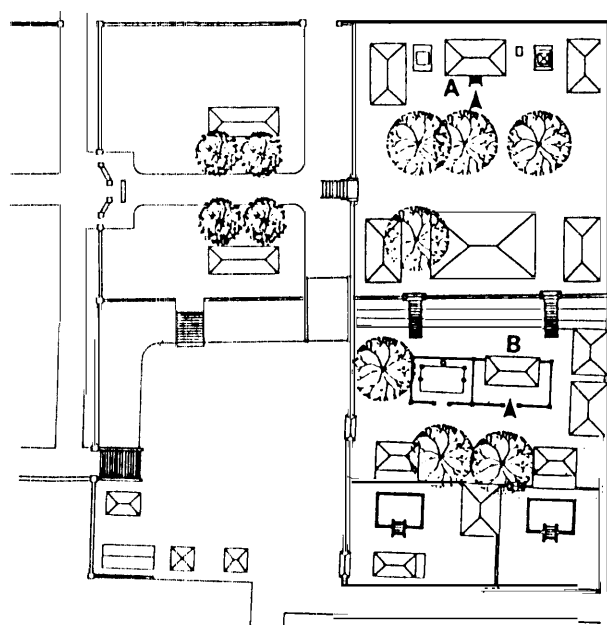


図4-1 Pura Lingsar 配置図

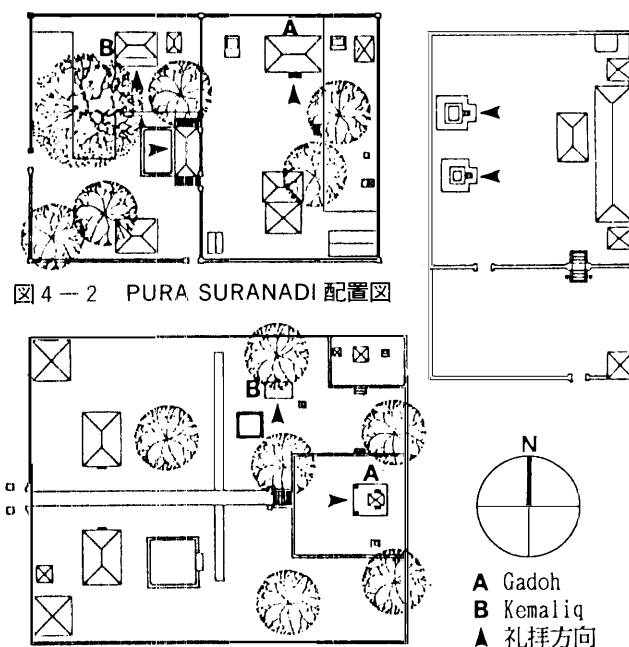


図4-2 Pura Suranadi 配置図

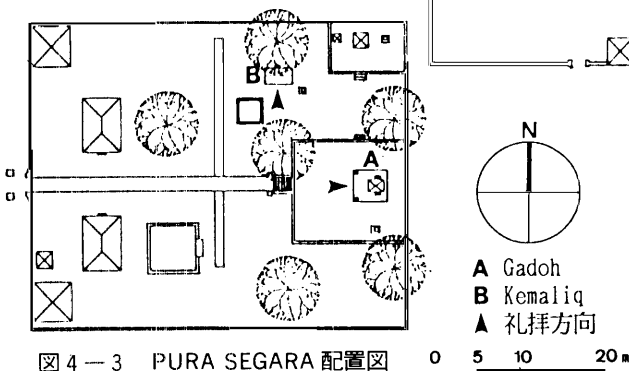


図4-3 Pura Segara 配置図

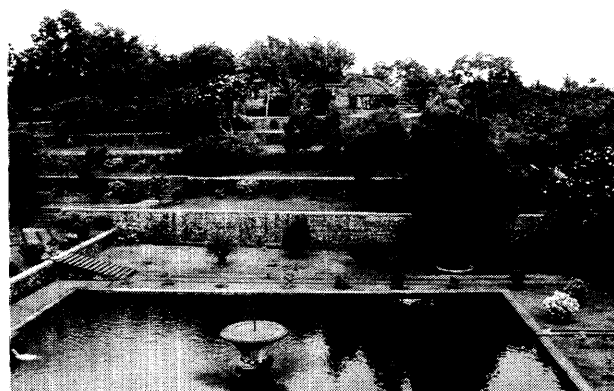


写真4-1 NARUMADA

5. 今後の課題

以上において、ロンボク島の都市・住居・集落についての概要をある程度明らかにした。港町アンペナン、デサ・サデについては紙数の関係で省略したが、第1次調査によっておよそ全体的な把握はできたと考えている。残された課題を列挙すれば以下のようなものである。

1. ロンボク島の住居集落

1) 住居集落の類型

- 地域類型
- バリ、スンバワ等周辺地域との比較
- ケース・スタディー

2) 住居とコスモロジーをめぐる事例比較 ——東インドネシアを中心に

2. チャクラヌガラ構成原理

1) チャクラヌガラの復元

- 実測
- ナガラクルタガマ¹⁵⁾との比較

2) ヒンドゥー都市との比較

- バリ・ヒンドゥー都市との比較
カラングセム、ギャニャール等
- ジャワ都市との比較
- インド、東南アジア諸都市との比較
- マナサラ、アルタシャストラとの比較

3) チャクラヌガラの实態調査

- ムスリムとヒンドゥー教徒の居住パターン
- 施設配置とコミュニティー組織

4) マタラム、アンペナン等周辺都市との比較

3. ロンボクの都市・集落・住居の構成原理 ——ヒンドゥー原理とイスラーム原理

<注>

- 住居の象徴論あるいは住居とコスモロジーをめぐる既往の研究については、佐藤浩司「民族建築学／人類学的建築学（上）（下）」（『建築史学』第一二号 一九八九年三月、第一三号 一九八九年九月）参照。
- インドネシアの住居とコスモロジーに関する代表的論文としては、以下のようなものがある。
Cunningham, C. E., 'Order in the Atoni House', *Bijdragen tot de Taal-, Landen Volkenkunde* 120 (1964): 34-68
Feldmann, J. A., 'The House as world in Bawomatalua, south Nias', E. M. BRUNER (eds.) *Art, Ritual and Society in Indonesia*, (1979): pp. 127-189
Fox, James J. (ed.), 'The Flow of Life: Essays on Eastern Indonesia', *Harvard Studies in Cultural Anthropology* 2, Cambridge, Massachusetts, London, (1980)
Forth, Gregory L., 'Rindi : An Ethnographic Study of a Tradition Domain in Eastern Sumba', *Verhandelingen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Landen Volkenkunde* 93 (1981)
Suzuki, Peter T., 'The limitations of structuralism, and autochthonous principles for urban planning and design

in Indonesia : the case of Nias', *Anthropos* 79 (1984) : pp. 47-53

Ellen, Roy, 'Microcosm, macrocosm and the Nuauulu house : concerning the reductionist fallacy as applied to metaphorical levels', *Bijdragen tot de Taal-, Landen Volkenkunde* 142-1 (1986) : pp. 1-30

山口昌男「家屋を読む：リオ族（インドネシア・フローレス島）の社会構造と宇宙観」*社会人類学年報* 9 (1983) : pp. 1-28

- イスラーム原理といっても必ずしも一般的ではない。ここでは、直接的にはチュニスを対象として、アラブのまちづくりの原理を明らかにするベシーム・S・ハキームの下記の著書を念頭においている。

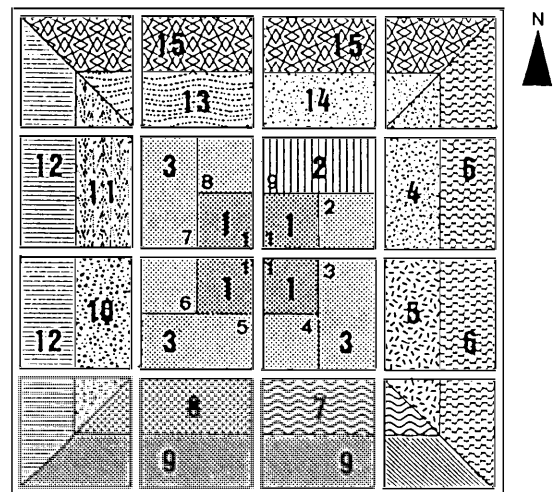
Hakim, B. S., "Arabic-Islamic Cities", London, 1988

『イスラーム都市——アラブのまちづくりの原理』（佐藤次高監訳 第三書館 1990年）

- 本研究の成果は様々な形で公表されつつある。そのひとつが、『事典 イスラームの都市性』（板垣雄三 後藤明 編 亜紀書房 1992年）である。

- カウティリア『実利論——古代インドの帝王学』（上村勝彦訳 岩波文庫 1984年）。カウティリアの記述をもとにした「都城」の復元は、P. V. Begde や W. Kirk によって試みられているが、応地利明は曼陀羅を下敷きにした説を提出している。

Ohji, T., 'The "Ideal" Hindu City of Ancient India as Described in the Arthashastra and the Urban Planning of Jaipur', *East Asian Cultural Studies* 29-1~4 (1990)



応地利明 復元案（上記論文より）

- マナサラについてはいくつかの研究書が公刊されてきたが、今のところ P. K. アチャラヤのものがその集大成になっている。
P. K. Acharaya, "Architecture of Manasara Vol. I ~ V" Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd. 1934 (re-print 1980)
- 日本陸軍参謀本部陸地測量部作製地図(1942年1月発行)。オランダの作製したものをもとにしたと思われる。アンペナンからチャクラヌガラまで6枚が繋がっている。
- ロンボク島の概要については主として以下のものを参照した。
Wheeler, T., "Bali et Lombok", Lonely Planet Publications, 1989
R. Goris, "Aantekeningen over Oost-Lombok, TBG76, 1936"
Alfons van der Kraan, 'The Nature of Balinese Rule on Lombok', 1975

9) ウォーレスは、以下の名著において2章をロンボク島にさいている。

A. R. Wallace, "THE MALAY ARCHIPELAGO. The Land of the Orang-Utan and The Bird of Paradise-A Narrative of Travel with Studies of Man and Nature", 1890, Macmillan and Co., London

(訳書：宮田彬訳 『マレー諸島』 思索社 1991年)

10) ロンボクの住居集落について第1次調査で入手した論文には以下のようなものがある。

Cederroth, Seven, 'The Spell of the Arcestors and the Power of Mekkah : A Sasak Community on Lombok', Gothenburg Studies in Social Anthoropology 3(1981)

Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, 'Arsitektur Tradisional Daerah Nusa Tenggara Barat', (1991)

Departomen Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan, 'Selintas Rumah Taradisional Sasak di Lombok', museum negeri nusa tenggara barat (1987/1988)

Gunawan Alif, M., 'Bangunan Tradisional Sasak Bagian dari Nasib Malang', asri 32(1985) : 43-5, 61-4

Dinas Pekerjaan Umum Propinsi Daerah Tingkat I Nusa Tenggara Barat, 'Bentuk Bangunan Tradisional Daerah Tingkat I Nusa Tenggara Barat', (1981)

11) バヤンに関する文献としては以下のものがある。

Baal, J. Van, 'Pesta Alip di Bayan' (1976)

Cederroth, Seven, 'The Spell of the Ancestors and the Power of Mekkah : A Sasak Community on Lombok', Gothenburg Studies in Social Anthoropology 3(1981)

Polak, Albert, 'Traditie en tweespalt in een Sasakse boerengemeenschap (Lombok, Indonesie)', Proefschrift, Rijksuniversiteit te Utrecht, (1978)

12) チャクラヌガラに関する文献としては以下のものがある。

Graaf, H. J. de, 'Lombok in de 17e eeuw', Mededeelingen van de Kirtya-Liefrinck van der Tuuk, Alf 16. (Djawa 21 : 6 1941) : pp. 43-61

Pigeaud, Th. H., 'Java in the Fourteenth Century Vol. I -V', Martinus Nijhoff, The Houge (1960-631)

Cool, W., 'De Lombok Expeditie', The Hague-Batavia, (1895)

13) プラ・メルの記事に際し、宇宙論的数(33)に関しては、以下の文献を参照した。

岡千曲「都城の宇宙論的構造—インド・東南アジア・中国の都城—」(上田正昭編『日本古代文化の探求—都城』社会思想社 1976)

14) ロンボク島のプラについては以下の文献がある。

喜多村正「ロンボク島のちまき合戦」(季刊民族学37 1986)

Arumugam, S., 'Lombok and Its Temples', (1990)

15) ナガラクルタガマ Negarakurtagama については、以下の文献が参照される。

Th. G. Pigeaud, "Java in the Fourteenth Century" 5vol. The Hague : Martinus Nijhoff

" 坂本 勉 慶応大学文学部 教授
イスラム社会史

" 金坂 清則 大阪大学教養部 助教授
都市・歴史地理学

" 佐藤 浩司 国立民族学博物館 助手
建築人類学

" Josef Prijotomo スラバヤ工科大学 講師
建築史

" Sutrisno Multiyoso インドネシア建築史学会
建築史

協力 脇田 祥尚 京都大学大学院

" 牧 紀男 京都大学大学院

<研究組織>

主査 布野 修司 京都大学工学部 助教授
地域生活空間計画

委員 応地 利明 京都大学文学部 教授
地域環境学

" 堀 直 甲南大学文学部 教授
中央アジア史